藤女子大学紀要，第 48 号，第Ⅱ部：125-131．平成 23 年．
Bull. Fuji Women's University, No. 48, Ser. II: 125-131. 2011.

特別支援学校の教育実習における学生の意識について(1)

── 実習生の期待・不安・成長に関するアンケート調査から ──

池田浩明　小川　透　武石詔吾

Abstract

A questionnaire survey was conducted for students selecting practice teaching at schools for special needs education. The results indicated that many students experienced anxiety regarding expectations prior to practice teaching at special schools as well as at usual schools. Further, it was found that students experienced feelings of growth and satisfaction through their practice teaching despite the worry.

1　はじめに

現在、幼・小・中・高等学校で障害のある子どもたちを教育する場合は、特別支援学校教諭免許の保有を要しないことになっている。しかし、障害のある幼児児童生徒は特別支援学校には全就学児童生徒の 0.7%（平成 20 年度）が就学しているが、幼・小・中・高等学校では、特別支援学級・通級による指導対象（1.1%）や文部科学省（2002）の調査（6.3%）を合わせると就学児の 7 %以上の子どもたちが特別支援教育の対象と考えられる。今後は、特別支援教育やインクルーシブ教育の理念から幼・小・中・高等学校に就学する障害のある子どもに対して質の高い専門的な教育が求められ、特別支援学校教員免許の保有が期待される。

特別支援学校教諭免許を取得するためには特別支援学校での教育実習（以後「実習」と称す）が必要である。本学科では、幼稚園教諭を基礎免許に特別支援学校教諭免許を取得することができる。学生は、2 年次と 3 年次に幼稚園教諭免許と保育士資格取得のために幼稚園、保育所、福祉施設で実習をする。その後、特別支援学校教諭免許を取得しようとする者は 4 年次に特別支援学校での実習に臨む。本学科の特別支援学校の実習の手引きには、次のような実習の意義が示されている。

①教えることは学ぶことの究極の姿である。
②教育の場は人間形成の場である。
③学校の全体像、教師の職務の大要を知る。
④「何を、どのように教えるか」という授業計画を立てることがいかに難しいかを知る。
⑤教育は、こころとこころの交流を通じて人類の文化を児童生徒に伝達する仕事である。
⑥人と人が対等に向かい合うことの重要性を知る。

ところで、実習は実習先の学校の理解と協力なしには実施できないのが現状である。その実施に当たって「送り手としての大学」と「引き受け手としての学校」の現状を概観すると以下のようなことが言える。

送り手としての大学では、特別支援教育に関する講義・演習を中心に、特別支援学校へのボランティア体験、実習に臨む事前指導としてのオリエンテーションと合わせて事後指導としての報告会を実施している。近年、特別支援学校に特別支援学校教諭免許取得のための実習を要請する大学が増加する傾向が見られる。

一方引き受け手としての特別支援学校においては、教員の業務が多忙化する中全校あげて受け入れ体制を整え、指導教官を指定し、配属学級を決め、学校によっては実習開始前にオリエンテー

Hiroaki IKEDA　藤女子大学人間生活学部保育学科
Toru OGAWA　藤女子大学人間生活学部保育学科
Shogo TAKEISHI　藤女子大学人間生活学部保育学科

ションを行い、より効果的な実習が出来るよう協力を得ている。特別支援学校及び指導教官は、送り手側の大学の実習を含む特別支援教育に関する履修課程において、学生一人一人がどのような授業を受け、どのような内容をどの程度理解しているかを具体的に把握しない中で実習指導に当たっているのが現状であると考える。

送り手としての大学側としても、これまで、特別支援学校での実習の開始に当たって、学生が実習に対して「どのような期待や不安を抱いているか」また「どのような情報を必要としているか」等の具体的な内容についてどの程度把握しているかは必ずしも明らかではない。これまで特別支援学校での実習に関する学生の意識を対象にした研究(小方ら、2009；是枝ら、2007；坂田ら、2007)もあるが、あまり多くない。

また、実習の報告会では「勉強になった、楽しかった」等の感想が多く聞かれるが、何が勉強になり、何が楽しく、実習を行ったことによって、何がどのように成長したのか、更に、実習中、辛かったことや困ったこと等もあったと思われるが、そうした具体的な内容の把握が十分に出来ているとは言えない。加えて、実習後、大学の履修課程や内容に対する具体的な意見や要望を聴取することも少なかったと考える。

2　目的

本研究では、実習に対して期待・不安及び成長等について学生がどのような意識をもっているかを明らかにするためのアンケート調査を実施し、本学科における特別支援学校での実習の現状と今後の改善・充実について検討する。

3　方法

本学科で特別支援学校の教育実習を選択している学生（45 名）に対して実習前の事前学習時と実習後に自由質問法と多選択法を併用した調査用紙を用いて調査を実施した。41 名（91%）からの回答があり、以下の方法で処理した。多選択法による結果は、集計後その割合を%で表記した。自由記述回答による各設問の記述内容は、KJ 法を用いてグループに分けた。各グループにおける記述数を全記述数に対する割合（%）で表記した。

4　結果

(1) 調査 1「実習前」に関して

①「期待」に関して

1−1：「実習への期待度」に関しては、図 1 の通りであり、「かなり期待した」と「少し期待した」をあわせると 75.6%であった。

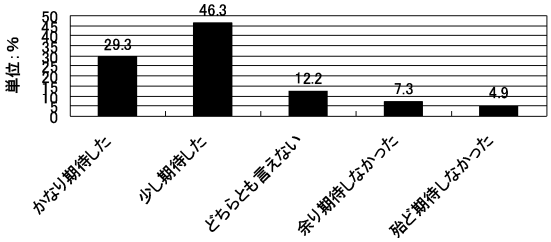

図 1　実習への期待度

1−2：「期待したこと」に対する自由記述は、図 2 のように「子どもとのかかわり」、「実習自体への興味」、「先輩の話を聞いて」、「未知に対する経験」、「新しい学び」等のグループに分けられた。

「子どもとのかかわり」では、「以前の実習で特別支援教育の必要な子どもがいたのでどのように接したらよいかを知りたかったため、かかわることの少なかった障害児とかかわることが出来るので、どのような障害児がいて・どのようなかかわりをもち、どのような関係を築けるか」等であった。

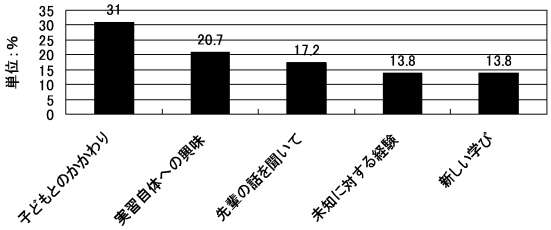

図 2　期待の主たる内容

「実習自体への興味」では、「子どもと特別支援教育の現場を自分の目でみたいと思った、特別支援教育・統合教育に関してこれまでの実習では本格的に触れることが出来ない領域であったために自分がどのように子ども達にかかわっていけるのかが楽しみ」等であった。

「先輩の話を聞いて」では、「とても勉強になった、楽しかった等の話を先輩から聞いていたので」

等で会った。

「未知に対する経験」では、「普段の生活ではかかわることが出来ない場なので新しい発見や気づきがあると思っていたから、教育の現場に入ったことがないので」等であった。

「新しい学び」では、「養護学校の教育は保育に通じるところがあると思ったから、何かを学べると感じていたから」等であった。

②「不安」に関して

2−1：「実習に対する不安度」に関しては、図3の通りであり、「かなり「不安」、「少し不安」をあわせると96.7%でほぼ全員が不安をもっていることを示している。

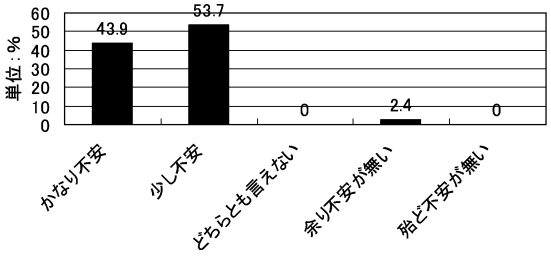

図3　実習への不安度

2−2：「不安」に対する自由記述は、図4のように「子どもとのかかわり」、「実習校のイメージの希薄」、「指導案の作成」、「実習への自信のなさ」、「実習時期」等のグループに分けられた。

「子どもとのかかわり」では、「障害児とかかわったことがない、適切な対応がとれるか、自分のミスで子どもが不安に思ったりパニックにならないかが心配」等であった。

「実習校のイメージが把握できない」では、「肢体不自由養護学校に関しての知識がない、どのような子どもがいてどのような授業を行うのか」等であった。

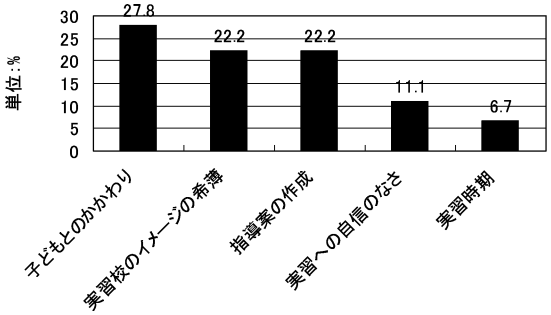

図4　不安の主たる内容

「指導案の作成」では、「指導案の様式や書き方がわからない」等であった。

「自信のなさ」では、「事前にどのような準備をしたらよいか、最後の実習だが自分にどれだけのことができるか」等であった。

「実習時期」では、「就職活動、卒業論文の提出の時期と重なる」等であった。

(2) 調査2「実習中」に関して

①「楽しかったこと」に関して

「楽しかったこと」に対する自由記述は、図5のように「子どもとのかかわり」、「授業づくりと展開」、「子どもの理解」、「子どもからの働きかけ」、「子どもと遊んだこと」等に分けられた。

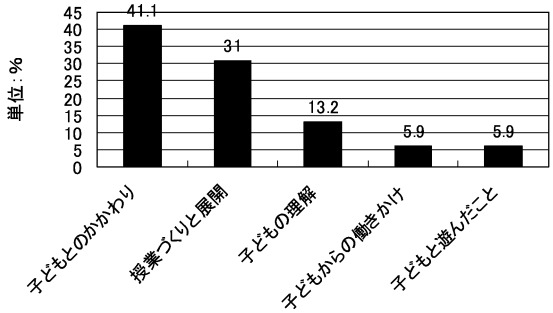

図5　楽しかったこと

「子どもとのかかわり」では、「子どもと気持ちが通じ距離がちぢまった、自分のしたことに対して何らかの反応を示してくれたこと、コミュニケーションがとれるようになったこと」等であった。

「授業づくりと展開」では、「自分が作った教材や内容に反応してくれたこと、授業の目標を達成した時は嬉しくやる気につながった」等であった。

「子どもの理解」では、「一人一人の表現の仕方を知った時、障害に関しての理解が深まった」等であった。

「子どもからの働きかけ」では、「自分の名前を覚えてくれ一緒に活動したこと、自分の存在を知ってくれたこと」等であった。

「子どもと遊んだこと」では、「いろいろな遊びをしたこと」等であった。

②「辛かったこと」に関して

「辛かったこと」に対する自由記述は、図6のように「指導案の作成」、「子どもとのかかわり」、「研究授業の準備と実施」、「通勤」、「指導教官との関係」等に分けられた。

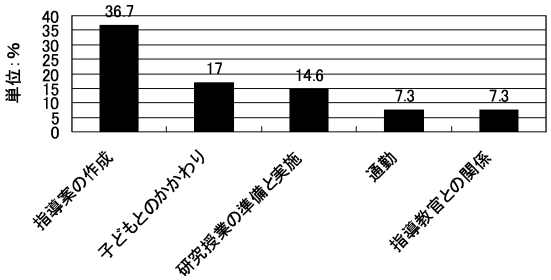

図6　辛かったこと

「学習指導案の作成」では、「指導案がこれまでと全く異なり完成するまでに時間がかかった、能力差に応じた指導案の作成」等であった。

「子どもとのかかわり」では、「うまくコミュニケーションがとれなかった、どこまで手を出したらよいか、授業に興味を示さない時の対応」等であった。

「研究授業の準備と実施」では、「研究授業が決まるのが遅かった、子どもの実態を把握し計画をたてなければならなかったこと」等であった。

「通勤」では、「勤務時間と交通機関の時間のずれ」等であった。

「指導教官との関係」では、「実習生への指導が出来て実習生もそれに応じて研究授業を行えるようにしてほしい」等であった。

③「困ったこと」に関して

「困ったこと」に対する自由記述は、図7のように「子どもとのかかわり」、「指導教官との関係」、「指導案の作成」、「研究授業の準備と実施」、「指導方法」等のグループに分けられた。

「子どもとのかかわり」では、「子どもの理解が困難で時間がかかり自分の対応が適切かどうか不安、どこまで援助しどこまで行動を見守るか」等であった。

「指導教官との関係」では、「指導教官と補助の先生の言うことが異なった時」等であった。

「指導案の作成」では、「指導案の書き方が分からず指導教官の言われるままであった、授業を設定する場合アイデアが浮かばなかった」等であった。

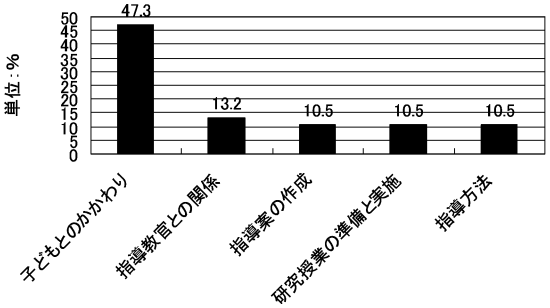

図7　困ったこと

「研究授業の準備と実施」では、「子どもの実態にあった授業づくり、障害の異なる子どもがいたので教材研究も困難」等であった。

「指導方法」では「興味が一人一人異なったクラスをまとめるのが困難であった、授業に取り組めない子どもへの声がけ」等であった。

(3) 調査3「実習後」に関して

①「実習の満足度」に関して

「実習の満足度」に関しては、図8の通りであり、「かなり満足した」、「少し満足した」で95.2%であった。

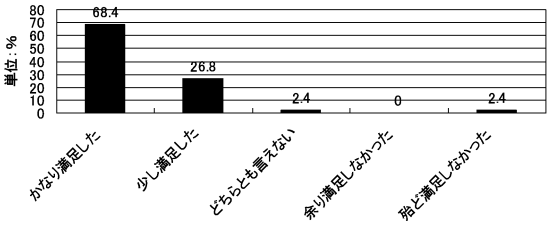

図8　実習の満足度

②「満足の内容」に関して

「満足の内容」に対する自由記述は図9のように「子どもとのかかわり」、「授業の楽しさ」、「学びの充実」、「特別支援教育への理解」、「経験の拡大」等のグループに分けられた。

「子どもとのかかわり」では「子どもに積極的にかかわる中で実態を把握し自分なりに支援の仕方を工夫できた、障害のある子どもと触れ合う機会があまり無かったので実習で子どもの様子、先生方の指導を見たり自分も体験できた」等であった。

「授業の楽しさ」では、「子どもの発達に応じた

授業づくりの重要性を理解できた、自分の作った教具に興味を示してくれた」等であった。

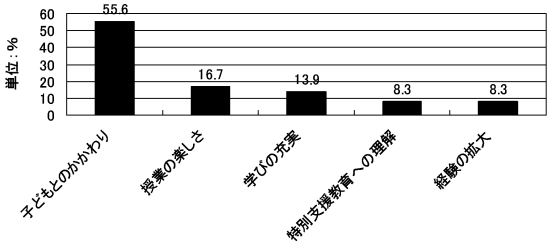

図 9　満足の主たる内容

「学びの充実」では、「保育とは違う教育の現場を見ることができ、その中で教育にとって大切なものなどを知る事ができた」等であった。

「特別支援教育への理解」では、「事前に比べて特別支援学校や先生を知る事ができこの教育への関心が高まった」等であった。

「経験の拡大」では、「全てが貴重な経験で辛い経験も人生の財産になった」等であった。

③「実習を通して自分が成長したと思うこと」に関して

「成長したと思うこと」に対する自由記述は、図 10 のように「子どもとのかかわり」、「子どもの理解」、「指導方法」、「視野の拡大」、「諦めない気持ち」等に分けられた。

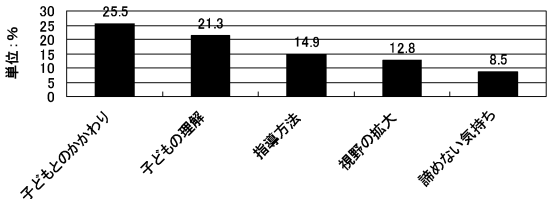

図 10　成長したと思われること

「子どもとのかかわり」では、「その場の状況に応じた対応が出来るようになった、子ども一人一人の実態を把握しようとする姿勢が大切であることを学び、一人一人に目を向けられるようになった」等であった。

「子ども理解」では、「生徒の表情を見て、今どんな気持ちかを推測できるようになった、子どもの行動をその前後の行動との関連から見ることが出来るようになった」等であった。

「指導方法」では、「TT 指導の大切さを知った、今までは子どもが困ったことは手伝ってあげていたが、子どもが出来る教材を準備し子どもが一人で出来るように指導することの大切さを得ることができた」等であった。

「視野の拡大」では、「保育の方法も一つだけが正しいのではなく子どもと一緒に成長しながら保育者も成長することを学んだ、いろいろな人がいて、その人特有の人柄と個性をもっていることを知った」等、「諦めない気持ち」では、「辛いことでも取り組む事の必要なことを学んだ」等であった。

5　考察

結果から本学科の多くの学生は、実習前では「期待と不安」をもちながら実習に臨み、実習中は「悩みや困ったことを感じながらも楽しみを見出し実習を遂行し」、実習後には「満足感」とともに「実習を通して成長したことを実感した」ということであろう。学生にとって特別支援学校での実習は、初めての経験である。実習に対して抱く不安は、「教育実習不安」（大野木等、1996）といわれ、多くの学生が実習前に不安を抱くことが示されている。人間がある事象を初めて経験する際、どのような意識を持つかに関して、前原等（2007）によれば、「その行動を自分が首尾よく実行できるかどうか」という「自己の有効性の期待」と「結果期待」の 2 つをあげている。以下この 2 点から考察を試みた。

(1) 実習前の「自己の有効性の期待」

実習前の「期待」と「不安」に対する「自己の有効性の期待」に関して、実習前の学生の「期待」は、「かなり期待」と「少し期待」を合わせると 75.6%であった。一方「不安」は、「かなり不安」と「少し不安」を合わせると 97.6%とほぼ全員が「不安」を感じていた。

これらの結果から「期待」と「不安」は表裏一体の関係にあることが分かった。「期待」という積極的な姿勢が見られる反面、「不安」を感じるのは、障害児・者や特別支援学校とのかかわりが少ないことや事前学習の不備等が要因になっているものと思われる。

(2) 実習中の「自己の有効性の期待」及び実習後の「結果期待」

実習中における「辛かったこと」や「困ったこと」等のストレスに対して指導教官を中心に他の教員の指導を受ける中で、子どもとかかわりながら自己反省を行い、善後策を考えながら問題解決に取り組み、実習が「楽しかったこと」へと変化していったものと思われる。

「結果期待」に関して、実習後の「実習に対する満足度」は、「かなり満足」と「少し満足」を合わせると95.2%でありほとんどの学生が満足をしていることが分かった。

「満足した」の95.2%は、実習前の「かなりの期待」と「少しの期待」の合計の75.6%を19.6%も越えており、実習前の期待以上に満足したことを示している。更に、実習前の「不安」と実習後の「満足」との関係は、実習前の「かなり不安」と「少し不安」の合計の97.6%とほぼ全員が不安を感じて実習に臨んだにも拘わらず、実習後、ほぼ全員が前述のように満足であったと回答している。この結果は、実習を遂行できた成就感や満足感によるものと考える。

(3)「結果期待」と「実習を通して成長したこと」

「結果期待」にみられるように、殆どの学生が不安をほぼ解消し満足に変化している。更に、成長したと答えた記述内容は図10の通り「子どもとのかかわり」や「子どもの理解」であり、他の記述内容には「チームテーチングの在り方、仕事現場での仲間とのかかわり方、先生方との連携の大切さ」等がみられる。成長した内容は「指導者に求められる資質」と言える。この内容は、幼稚園・保育所等の指導者になった場合にも必要不可欠な資質であり、こうした資質が実習を通して取得できたものと考える。

(4) 特別支援学校における実習の有効性に関して

特別支援学校での実習においてはほとんどの学生が不安を有していたが、実習という具体的な営みを通してほとんどの学生が満足をしたと回答した。本学科の特別支援学校における実習の実施の意義は、「はじめに」で述べた通りで、実習はこの意義の観点からも極めて有効な場であったと考える。

本学科の卒業生の多くが幼稚園、保育所に就職する。障害がある子どもの保育とともに、その保護者、更には、関係機関や進学先の小学校、特別支援学校等の関係者と対応をしなければならないことが想定される。そうした時に、特別支援学校における実習で得た事柄は有効に働くものと考える。今後は、本学科のより多くの学生が特別支援学校における実習を体験することによって、教育者としての優れた資質を身に付けることを期待したい。

6　おわりに

実習の前後に学生の意識調査を行った結果、学生の多くが不安と期待を感じながら実習に臨んでいるが、実習後には満足感を感じ、実習の意義や有効性が示唆された。また、「辛かったこと」以外のすべての問で「子どもとのかかわり」に関する記述が一番多かった。今後は調査数を増やし、調査結果の信頼性を高めるとともに背景の分析が課題であろう。さらに、実習をより効果的に行うために必要な事項に関して、実習先の学校や指導教官及び大学への意見・要望等もみられたことから、これらへの対応の検討が必要であると考える。

文献

赤星晋作（2008）新教職概論　学文社

大野木裕明・宮川光司（1996）教育実習不安の構造と変化　教育心理学研究　教育心理学研究，44，454-462.

大森正（2008）新･介護等体験･教育実習の研究　文化書博文社

小方明子・木下博美（2009）教育実習改善のための取組とその展望 ── 教育実習及び事前事後カリキュラムの開発 ──　香川大学教育実践総合研究，19，65-70

是枝喜代治・上田往三（2007）社会福祉系大学における特別支援学校教員養成の教育的意義について ── 教育実習生によるアンケート調査から ──　日米高齢者保健福祉学会誌，2，307-315

坂田花子・東平明子・江田裕介（2007）付属特別支援学校における教育実習の在り方について探る ── 教育実習生への調査を通して ──　和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要，17，111-119

高橋真由美（2009）幼稚園教育実習における学生の学びに関する一考察(2)　藤女子大学紀要，46，第Ⅱ部，113-118

前原武子・平田幹夫・小林稔（2007）教育実習にお

調　査　票

調査１　「実習前」に関して

★ 実習開始にあたっての「期待」・「不安」等についてお聞きします。

問１－１　「期待」に関して

①（ ）かなり期待があった　②（ ）少し期待があった

③（ ）どちらとも言えない

④（ ）あまり期待がなかった　⑤（ ）ほとんど期待がなかった

問１－２　選択した番号に関して、具体的にはどのような内容（例、障害のある子の理解、指導の方法等）で、その理由がわかれば書いてください。

１　内容

２　理由

問２―１　「不安」に関して

①（ ）かなり不安があった　②（ ）少し不安があった

③（ ）どちらとも言えない

④（ ）あまり不安がなかった　⑤（ ）ほとんど不安がなかった

問２－２　選択した番号に関して、具体的にはどのような内容（例、障害のある子の理解、指導の方法等）で、その理由がわかれば書いてください。

１　内容

２　理解

調査２　「実習中」に関して

問３　「楽しかった内容」を具体的に書いてください。

問４　「辛かった内容」を具体的に書いてください。

問５　「困った内容」を具体的に書いてください。

調査３　「実習後」に関して

問６－１　「特別支援学校の教育実習」において、実習における自分の課題との関連から実習を終えた段階での「満足度」をお聞きします。該当する項目を選んでください。

①（ ）かなり満足感を感じた　②（ ）少し満足感を感じた

③（ ）どちらともいえない

④（ ）少しも満足感を感じない　⑤（ ）ほとんど満足感を感じない

問６－２　選択した番号に関して、その理由を箇条書きで書いてください。

問７　実習を通して自分が成長したと思うことはなんですか。その内容を具体的に書いてください。

問８　実習に際して、実習先の学校に希望・要望する内容があればどのような内容がありますか。

問９　実習中、指導教官に対して希望・要望する内容があればどのよう内容がありますか。

問１０　実習を振り返り、大学の講義、オリエンテーション等で役立った内容があればその内容を書いてください。